

2012年度卒業論文紹介

李 彩花

『ニーベルンゲンの歌』でみる古代ゲルマン精神

ゲルマンの人々は、もともとキリスト教の民ではなかった。それにもかかわらず今日のドイツには、キリスト教化以前の資料がほとんど残されていない。ドイツでのキリスト教への改宗が、だいたい3、4世紀から始まり9世紀頃にはすんでいたとしても、彼らはもともと非キリスト教徒であったのだから、彼ら独自の信仰や習慣が、キリスト教への改宗にともなってすべて消えてしまうとは考えにくい。ではキリスト教の世界とは異なるゲルマン民族独自の文化や価値観とは、いったいどのようなものであろうか。本論文では、古代ゲルマンの英雄伝説をもとにした叙事詩『ニーベルンゲンの歌』と、それと非常に強い関わりをもち、また同じゲルマン系でもある北欧の『ヴォルスンガ・サガ』の内容を比較検討していきながら、古代ゲルマン人たちの特徴を探っていく。

『ニーベルンゲンの歌』とは、5、6世紀の民族大移動時代にライン河畔フランケン領土で発生した「ブリュンヒルト伝説」と「ブルグント伝説」という二つの古代ゲルマンの英雄伝説をもとに、いくつかの段階を経て13世紀初頭にオーストリアの詩人によって纏めあげられた叙事詩である。この際、詩人が『ニーベルンゲンの歌』に中世の騎士社会の描写を加えたことによって、この叙事詩には古代ゲルマン伝説をもとにした英雄叙事詩という側面と、宮廷叙事詩という二つの側面をもつことになった。

また、『ニーベルンゲンの歌』の前史となった伝説は、それぞれの段階において他の地方へも伝承されているのだが、その第一次伝承としてヴァイキングたちによって口承で伝えられたであろうものを、1260年頃にアイスランドの物語詩人によって纏められたものが『ヴォルスンガ・

サガ』である。したがって『ヴォルスンガ・サガ』は『ニーベルンゲンの歌』よりも成立時期こそ遅いものの、より古い伝説相をしめているといえる。また、きらびやかな宮廷描写の『ニーベルンゲンの歌』に対し、オーディンなどといった北欧神話的な要素と強く結び付いていることも『ヴォルスンガ・サガ』の特徴といえる。

同じ伝説からできた二つの物語であるが、いくつかの相違点がある。例えば、『ヴォルスンガ・サガ』では、ジグルズ、ブリュンヒルトやニーベルンゲンの財宝などがオーディンと何らかの関わりを持っているなど、しばしば北欧神話的な要素が垣間見える。一方で『ニーベルンゲンの歌』では、ジークフリートが一国の気高い王子になっており、クリームヒルトの高きミネを得ようとするなどの中世の騎士社会の習慣やきらびやかな宮廷描写がみられる。また、ジークフリート／ジグルズを殺されたクリームヒルト／グズルーンの復讐対象が、『ニーベルンゲンの歌』ではジークフリートを殺害したハーゲン及びブルグント一族であるのに対し、『ヴォルスンガ・サガ』ではジグルズの財宝を欲し、グンナルたちを殺したアトリ王である。このように5、6世紀に発生した古代ゲルマンの英雄伝説が、時代や場所を変えながら、内容を変え、それぞれの場所や時代による特徴が加えられていきながら、同じ素材を用いた物語は、少しずつ違った物語となったのである。

しかしながら、二つの物語に共通して描かれているテーマもある。それは、「復讐」である。物語前半部分では、傷つけられたブリュンヒルトとグンター／グンナルの名誉を回復するために、物語後半部分では、クリームヒルトを騙しジークフリートを裏切ったハーゲンやグンターをはじめとするブルグント一族に対し、また『ヴォルスンガ・サガ』ではグンナルたちを殺害したアトリ王に対して復讐が行われる。このように、「復讐」というと一見すると粗野で野蛮な響きがあるが、『ニーベルンゲンの歌』や『ヴォルスンガ・サガ』において、復讐は名誉の回復のために行われるのである。また、誰かの名誉を傷つけるということは、死をもって償わなければいけないのである。すなわち、彼らはそれほどまでに、名誉を重んじ、名誉を傷つけられることをひどく嫌うのである。そうして、そのことは、ブルグント／ギーピヒュー族の滅亡の原因のひとつでもあるのだ。『ニーベルンゲンの歌』のなかで、フン国からの招

待に応じるべきではないと主張していた慎重なハーゲンも、ゲールノートに臆病者扱いされたことにより、意見を翻してしまう。また、敵の国で欺かれたと気がついた後も、彼らは戦わないことをよしとせず、最後まで自らの名誉を守るために戦うのである。このように、彼らは名誉を重んじ、名誉のために生き、そして名誉のために死んで行くのである。これこそが、『ニーベルンゲンの歌』と『ヴォルスンガ・サガ』における、ゲルマン人の共通の特徴といえるのではないだろうか。